

『ハリー・ポッター』シリーズにおける J. K. ローリングの「いじめ」解体 —— 賢者の「石」とアズカバンの「囚人」の復位 ——

杉 野 久 和

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿は、魔法界の描写に先立って（魔法を使えない）ダーズリー家でおこる「いじめ」の頓挫 —— 「いじめ」られている側の視点に立つと復位 —— を提示する。まずは、『賢者の石』における学校名から「石」と「金属」をめぐる優劣関係を指摘し、「岩場」におけるダーズリー家の敗北による優劣関係の解体を示す。そして、『アズカバンの囚人』における贈り物とダーズリー氏の形容詞から「犬」と「牛」をめぐる優劣関係を指摘し、「牛いじめ」を読み取った後、ここでも優劣関係が解体されていることを提示する。

その後、「いじめ（る者）」（bully）表象に焦点を絞り、作者 J. K. ローリングの緻密な作品創作に光を当て、シリーズ冒頭の意義を示す試みとなる。

I. ダーズリー家で始まる

『ハリー・ポッター』

『ハリー・ポッター』(*Harry Potter*) シリーズは¹⁾、作者 J. K. ローリング (J. K. Rowling, 1965-) の緻密な意想図に基づく大作である。John Granger によれば、ローリングが何度も口にしていたのは、最終巻の最後の 1 単語に至る細部まで何年もかけて下図を作っていたことである（‘Rowling has said many times that her books have all been outlined in some detail for years—down to the last word in the seventh book’ *Hidden Key* 202）。実際、これを裏付けるように、創作過程は徐々に公開されつつあり、例えば、第 5 巻『不死鳥の騎士団』の手書き計画表は *Harry Potter: A History of Magic* にて視認できる（240-41）。入念に作りこまれていたことは推察できるものの、全 7 巻あるシリーズにおいて、どの程度まで思考が凝らされていたのか、特に具体的な単語の選択ともなれば、未だ多くは謎に包まれている。作中では決して解説されることのない謎 —— 言語選択の背景 ——

を解き明かす時、『ハリー・ポッター』の複層的な享受が可能となる。

本稿が解明を試みるのは、魔法界の展開に先立ち人間界が描出されるシリーズの冒頭である。作品の「冒頭」は、David Lodge が「敷居」（‘threshold’）に例えて読者を引き込む必要性和その難しさを説くように（Lodge 4-5）、とりわけ重要な位置づけにあることは疑う余地もない。第 1 巻の冒頭には、登場人物の紹介といった物語上の導入が記されているだけでなく、言語の多義性を活かした伏線が周到にも張り巡らされている。当該の 2 段落は、以下の通りにダーズリー家（the Dursleys）の描写である。

Mr and Mrs Dursley, of number four, Privet Drive, were proud to say that they were perfectly normal, thank you very much. They were the last people you’d expect to be involved in anything strange or mysterious, because they just didn’t hold with such nonsense.

Mr Dursley was the director of a firm called Grunnings, which made drills. He was a big,

beefy man with hardly any neck, although he did have a very large moustache. Mrs Dursley was thin and blonde and had nearly twice the usual amount of neck, which came in very useful as she spent so much of her time craning over garden fences, spying on the neighbours. The Dursleys has a small son called Dudley and in their opinion there was no finer boy anywhere.

(*Philosopher's Stone* 1)

第1段落では現状に満足するダーズリー夫妻が記され、第2段落では夫ダーズリー氏が「ドリルを製造するグラニングズ社の社長」と紹介されている。そして、経済的には豊かなものの、「大きく肥満して首がほとんどない」(‘a big, beefy man with hardly any neck’) 身体的特徴が続いて示される。概して、敬意を欠く上記の描写からは、語り手がこの一家に対して冷ややかな眼差しを向けていることが読み取れる²⁾。さて、上記の引用部に後続する第3段落では、「ポッター」という名前が初めて提示され、ダーズリー家と主人公ハリーとの関係性が次第に明らかとなる。ダーズリー家は、ダーズリー夫人の妹にあたる、ハリーの母親ポッター夫人を「ダーズリー的でない」(‘unDursleyish’) とみなして好んでおらず(1-2)、差異が強調されている。両親が亡くなり、身寄りのないハリーは、彼の両親をよく思わないダーズリー家に引き取られ、冷遇されながら育つ。魔法界が本シリーズの中心であるとはいえ、これに先立つダーズリー家、すなわち人間界での日々もシリーズで繰り返し描き出されており、作者ローリングの拘りは明らかだ。魔法界の描写と(人間界のうち最も前景化される)ダーズリー家の描写は、決して無関係ではない。むしろ、魔法界での展開を予告する、対応関係すら有している。

本稿は、まず、魔法界で重視されるものを予告するような、ダーズリー家で生じるハリー「いじめ」とその頓挫——「いじめ」られて不当に劣位へと貶められていた側に立てば復位——を提示する(第Ⅱ節、第Ⅲ節)。Catherine M Wallaceが「ローリングはいじめを主題としてとても繊細に扱い、主に作品展開を通してまとめ上げてい

る」(‘Rowling handles bullying as a theme very delicately, formulating it mostly through plot developments’ 19)と述べる通り、「いじめ」(bullying)という主題を作者ローリングは意識的に扱っている。本稿における考察の対象は、第1巻『賢者の石』と第3巻『アズカバンの囚人』である。論を先取りすれば、この両作品におけるダーズリー氏の描写を分析することによって、シリーズ冒頭の第2段落に潜在する創作の意図が浮かび上がる。これら個別の作品分析の後、作者ローリングの「いじめ」(bully)に対する姿勢を確認し(第Ⅳ節)、冒頭の妙技に光を当てたい(第Ⅴ節)。

Ⅱ. 『賢者の石』における「石」の復位

第1巻の中心的出来事は、タイトル『賢者の石』からも明らかな通り、「石」をめぐる冒険や戦いである。「賢者の石」とは、どんな「金属」(‘metal’)も「純金」(‘pure gold’)へと変化させる伝説の物質である(*Philosopher's Stone* 236)。「金属」との関係で「石」が重要な位置づけにあることは間違いないが、ダーズリー家の描写においては、「石」が「金属」に劣るとみなされる。人間界の描写で変位する「石」を以下で検証する。「金属」と「石」の優劣関係(への欲望)が露見するのは、ダーズリー家で暮らす2人の子どもたちが別々の学校に通う予定だと語られる場面である。

When September came he [Harry] would be going off to secondary school and, for the first time in his life, he wouldn't be with Dudley. Dudley had a place at Uncle Vernon's old school, Smeltings. Piers Polkiss was going there, too. Harry, on the other hand, was going to Stonewall High, the local comprehensive. Dudley thought this was very funny.

(*Philosopher's Stone* 33-34; 下線筆者)

ダーズリー家の長男ダドリーは父親の出身校でもある「スメルティングズ校」(‘Smeltings’)に通う予定である。そして、この時点でのハリーは魔

法学校 hogwarts (Hogwarts) でなく、「ストーンウォール校」(‘Stonewall High’) に通うはずであった。このことを「とても愉快」(‘very funny’) と嘲るダドリーは、「ストーンウォール校」より「スメルティングズ校」の方が優れていると考え、悦に入る。すなわち、ダドリーの視点では、2 人の学校選択に関して「優劣」が存在する。ここで注目すべきは、2 人が進学（を予定）する学校の名前である。ダドリーが進学する学校名 ‘Smeltings’ には「(金属を) 精錬する」を意味する ‘smelt’ が含まれており、ハリーが進学予定の学校名 ‘Stonewall High’ には「石」を意味する ‘stone’ が含まれている。すなわち、学校の違いにおいては、2 人の優劣だけでなく、「金属」と「石」の対立と、その優劣をも読み取れる。

金属に価値を置くことは、ダーズリー家の特徴である。例えば、作品冒頭で紹介される通り、ダーズリー氏は「ドリルを製造するグラニングズ社の社長」である (‘the director of a firm called Grunnings, which made drills’ *Philosopher’s Stone* 1)。「ドリル」は暴力的な金属利用を象徴しているのかもしれない。そして、長男ダドリーへの誕生日プレゼントも以下の通り金属類ばかりである。

At that moment the telephone rang and Aunt Petunia went to answer it while Harry and Uncle Vernon watched Dudley unwrap the racing bike, a cine-camera, a remote-control aeroplane, sixteen new computer games and a video recorder. He was ripping the paper off a gold wristwatch when Aunt Petunia came back from the telephone, looking both angry and worried.

(*Philosopher’s Stone* 23)

明記されているだけでも、「競技用自転車」、「映画用投影機」、「遠隔操作の飛行機」、「16 ものコンピューター・ゲーム」、「録画機器」、「金色の腕時計」と数多くの金属類がダドリーに贈られている³⁾。

金属の価値を信じて疑わないダーズリー家の大黒柱ダーズリー氏は、「ダーズリー的でない」魔法界からの接触を極度に恐れている。第 1 巻でそ

れが最もよく表れているのは、「ストーンウォール校」に進学寸前であったハリーのもとに hogwarts への入学案内状が届く場面である。差出人が明記されていないにも拘らず、ハリーに届いた 1 通の手紙を見て直ちに hogwarts からだと察知したダーズリー氏は、その手紙をすぐさま処分する。しかし、ハリーが手紙を受け取れていないことで、手紙は際限なく届き続ける。最初は 1 通だった手紙が、3 通、12 通、24 通、30~40 通と益々増えていき (*Philosopher’s Stone* 41-43)、怯えたダーズリー氏はどうかして手紙がハリーに届かないよう、ホテルや森の中、耕作地、吊り橋の真ん中、立体駐車場の屋上へと逃げ惑う (*Philosopher’s Stone* 45-46) —— ホテル名も、「鉄」道 (rail) を見るためと言わんばかりの ‘Railview Hotel’ (*Philosopher’s Stone* 45)。手紙が届かない場所を模索したダーズリー氏が最後に選んだ場所は海に浮かぶ無人島である。

‘Found the perfect place!’ he [Uncle Vernon] said. ‘Come on! Everyone out!’

It was very cold outside the car. Uncle Vernon was pointing at what looked like a large rock way out to sea. Perched on top of the rock was the most miserable little shack you could imagine. One thing was certain, there was no television in there.

(*Philosopher’s Stone* 46-47)

ダーズリー氏が逃げ場として選んだ「岩」(‘rock’) の上に立つ掘っ立て小屋で、ハリーは 11 歳の誕生日を迎える。ちょうど日付が変わる深夜 0 時に、誰もいないはずの小屋の外で ‘BOOM’ と轟音が鳴る。人が訪れることなどあろうはずないと信じて岩場までやってきたダーズリー氏は、金属製の武器「ライフル銃」(‘rifle’) を手に持ち、外へ向かって「俺は武装している」(‘I’m armed!’) と威嚇する (*Philosopher’s Stone* 50)。

ダーズリー氏の脅しも空しく、扉を壊して大男のルビウス・ハグリッド (Rubeus Hagrid) が小屋に入り込む。ダーズリー氏はこの大男を追いつ

うと手に持っていた銃を突きつけ、抵抗を試みる。

‘I [Mr Dursley] demand that you leave at once, sir!’ he said. ‘You are breaking and entering!’

‘Ah, shut up, Dursley, yeh great prune,’ said the giant [Hagrid]. He reached over the back of the sofa, jerked the gun out of Uncle Vernon’s hands, bent it into a knot as easily as if it had been made of rubber, and threw it into a corner of the room.

(*Philosopher’s Stone* 51)

大男のハグリッドは、ダーズリー氏が構える銃を「ゴム」(‘rubber’)のように簡単に折り曲げる。暴力的な「金属」である銃がへし折られると同時に、ハリーの Hogwarts 入学を阻みたいダーズリー氏の私心も挫かれており、「金属」に価値を置くダーズリー氏の敗北は明らかだ。ハリーの「ストーンウォール校」を小馬鹿にするなど、「石」を軽視し、「金属」の優位を妄信していたダーズリー家が敗れた場所は、皮肉にも「岩の上の小屋」(‘Hut-on-the-Rock’ *Philosopher’s Stone* 55)なのである。ハリーとダドリーの学校選びなどから読み取れる「ダーズリー的」価値観——「金属」が「石／岩」に優位——は愚かな幻想に過ぎない。「金属」を変化させる「賢者の石」をめぐる、魔法界での冒険に先立つダーズリー家の描写で、「石」は主人公ハリーと結び付けられ、「金属」との関係で不当に貶められるも、その劣位は解体されている⁴⁾。そもそも、数多くのドラマが起こる魔法学校 Hogwarts を構築しているのは——すなわち、『ハリー・ポッター』シリーズ全体を支えているのは——「石壁」(‘stone walls’)であり、「石畳」(‘stone floor’)である(*Philosopher’s Stone* 121)。とりわけ『賢者の石』において、前景から背景まで、「石」がその重責を担っている。

Ⅲ. 『アズカバンの囚人』における「犬」の復位

第Ⅱ節では、第1巻『賢者の石』においてダー

ズリー家で蔑まれる「石」とその復位を示したが、本節では第3巻『アズカバンの囚人』においてダーズリー家で蔑まれる「犬」とその復位を提示する。そもそも、この第3巻において「犬」が果たす役割は大きい。タイトルの「囚人」(the prisoner)とされる人物は、シリウス・ブラック(Sirius Black)であり、「シリウス」(Sirius)という語が「おおいぬ座の恒星」(dog star)を意味することで示唆されるように、彼は変身術(‘animagi’)で、物理的に「(囚)人」にも「犬」にも姿を変える。すなわち、タイトルは「人」と「犬」の両義の人物を指す。さらに、「囚人」と解釈される‘prisoner’は「囚われた人」を意味するが(‘A person who is kept in prison or in custody; spec. one who is legally committed to prison as the result of a legal process, either as punishment for a crime committed, or while awaiting trial for an offence.’ ‘prisoner, n. 2’ 2 *OED Online*)、必ずしも「人」に限らず広く「囚われた存在」も示す(‘A person who or thing which is confined to a place or position’ ‘prisoner, n. 2’ 3a *OED Online*)。両義のシリウスを指し元来的に広義な意味合いの‘the Prisoner’からは「囚人」かつ「囚犬」の多義性すら読み取れよう⁵⁾。タイトルに含意されるほど第3巻で「犬」は中心的な存在なのである。

第3巻における「犬」は、端的に言えば、光の当たる存在だ。まず、魔法界において、「人」であり「犬」でもあるシリウス・ブラックは、牢獄アズカバンから脱獄した凶悪犯とみなされていたが無実の罪で投獄されていたと、ハリーや近しい友人たち(と読者)に限って提示されている。憎むべき悪者扱いから一転して、最後にはハリーを陰ながら支援する「代父」(‘godfather’)としてむしろ大切な存在に変わる(*Prisoner of Azkaban* 402)。そして、この展開に先立つダーズリー家の描写でも「犬」が登場する。ここでの「犬」は、軽蔑の対象と位置づけられるも、その潜在的な能力を発揮してそこから脱却する。以下では、この変容に焦点を当てる。

『アズカバンの囚人』のダーズリー家における「犬」軽視を読み解くうえで手掛かりとなる場面は、マージおばさん(Aunt Marge)がダドリーと

ハリーへ異なるプレゼントを与える時である。プレゼントの違いは、彼女がそれぞれに対して抱く気持ちの違いでもある。

At Dudley's fifth birthday party, Aunt Marge had whacked Harry around the shins with her walking stick to stop him beating Dudley at musical statues. A few years later, she had turned up at Christmas with a computerised robot for Dudley and a box of dog biscuits for Harry. On her last visit, the year before Harry had started at Hogwarts, Harry had accidentally trodden on the paw of her favourite dog. . . .

(*Prisoner of Azkaban* 19; 下線筆者)

クリスマスにやってきたマージおばさんは、ダドリーに「コンピューター・ロボット」(‘a computerised robot’)を与え、ハリーに「犬用ビスケット」(‘dog biscuits’)を与えている。ダドリーへのプレゼントが金属類であることは言うまでもなく、注目すべきはハリーへの贈り物が「犬」を対象とした食べ物である点だ。むしろ、ハリーへの贈り物が敬意や思いやりの籠ったものだと考えられず、ハリーに対する冷遇の一種である。そして、マージおばさんが「ブルドッグ」(‘bulldogs’)を飼っていることから (*Prisoner of Azkaban* 19), ハリーは「ブルドッグ」と同じ扱いをされている、と解釈できる。

こうして、マージおばさんからブルドッグ扱いされたハリーは、ダーズリー氏からいじめられる——愚かにも「ダドリーの目」にはそう映る。具体的には、ダドリーに寄った視点から ‘Dudley smirked and withdrew his gaze from the television. Watching Harry being bullied by Uncle Vernon was Dudley's favourite form of entertainment’ (*Prisoner of Azkaban* 20; 下線筆者) と記されている。ここでのダドリーは、笑みを浮かべてテレビから視線を移し、父親ダーズリー氏に「いじめられる」(‘being bullied’) ハリーの姿を見る。つまり、ダーズリー氏が優位にハリーをいじめていていると思ひこみ、ダドリーは喜んでいる。

しかし、「ダーズリー氏」と「ハリー」の優劣

関係はダドリーが期待するほど確かなものでない。ダドリーは気づいていないようだが、「ハリーをいじめるダーズリー氏」という関係性は揺るがされているのだ。これを紐解くために注目すべきは、ダーズリー氏を説明する際に語り手が用いる形容詞 ‘beefy’ である。繰り返し使用されるこの単語は、上述のハリーいじめが描かれる直前でも、‘Harry sat down between Dudley and Uncle Vernon, a large beefy man with very little neck and a lot of moustache’ (17; 下線筆者) と改めて記され、強調されている。確かに、英単語 ‘beefy’ は、人間を形容する場合に「肥満した」(‘obese’) や「強壮な」(‘brawny’) を意味するものの (‘beefy’ a *OED Online*), 語源を *Oxford English Dictionary* で ‘Etymology: < beef n. + -y suffix’ と確認するまでもなく、「牛(肉)」(beef) からの連想に基づいていることは明白だ。「ダーズリー氏」と「牛」が暗に紐づけられている。

ここで、「ダーズリー氏」を「牛」と捉える議論をあえて中断し、ダーズリー氏の息子ダドリーが「豚」(pig) と関連深いことを確認する——目的は、「ダーズリー氏」と「牛」の関連が突飛な連想でないことを確かめるためであり、作者が意識的に人間と動物を関連づけうることを確認するためである。ダーズリー氏の息子ダドリーは様々な形で「豚」に結び付けられている。例えば、ダドリーの目は「豚のような小さい目」(‘his piggy little eyes’ *Prisoner of Azkaban* 17) と描写される。また、時に「ハムのような両手」(‘ham-like hands’ *Order of the Phoenix* 12) とさえ形容される「肥えた」身体は、‘his porky shoulder’ (*Prisoner of Azkaban* 21) や ‘his porky hands’ (*Goblet of Fire* 36) と表現される。つまり、父親ダーズリー氏の ‘beefy’ と同じく、食用加工を経た後の ‘pork’ (豚肉) を連想させる形容詞 ‘porky’ が使用されている。そして、これらは単なる語法上の比喩に留まらない。すなわち、ハグリッドに魔法をかけられたダドリーは、「丸まった豚の尻尾」(‘a curly pig’s tail’ *Philosopher’s Stone* 64) を生やすのだ。

本題に戻ると、『ハリー・ポッター』シリーズにおいて動物に関連する表現を単なる比喩と片付

けてはならない。ダドリーの「豚」に加えて、おおいぬ座の恒星 (dog star) を示す「シリウス」が「犬」(dog) に変身する例も考慮すれば、『ハリー・ポッター』シリーズにおける動物に纏わる表現を作者が意識的に用いていることは確かである。つまり、ダーズリー氏を形容するために使用される ‘beefy’ に含まれる動物「牛 (肉, beef)」の要素も無視できない。以上から、マージおばさんに「犬用ビスケット」を与えられた「ハリー」と、語り手に ‘beefy’ と形容される「ダーズリー氏」が対立する背後に、「犬」と「牛」の対立が想定できる。

「犬」と「牛」の対立が表現していることは、「牛いじめ」(bullbaiting) である。「牛」に「犬」をけしかけるこの戦いのために、「牛」に対峙するに耐える「犬」の品種改良が行われた結果、「牛いじめ」に適した犬種が開発された。それこそが名前に「牛」を意味する ‘bull’ を内包した「犬」(dog) すなわち「ブルドッグ」(bulldog) —— マージおばさんが飼っていて、ハリーが同等に扱われた犬種。「牛いじめ」という見世物は廃れてしまったものの、ブルドッグを形作った目的は確かにこの戦いなのである (Fleig 78)。「ヒッポグリフいじめ」(‘Hippogriff-baiting’ *Prisoner of Azkaban* 232) との言葉遣いからも、「牛いじめ」(bullbaiting) を含む歴史に作者 J.K. ローリングが無知であるはずがない。ヒッポグリフのバックビークが紐 (‘rope’) で繋がれ処刑され (かけ) たように、「牛いじめ」において紐で繋がれた「牛」は実質的に処刑されるのであり、「いじめ」(baiting) において全くもって優勢でない。

「ハリー」と「ダーズリー氏」の対立は、ダドリーの「豚のような小さい目」(‘piggy little eyes’) から見れば、「ダーズリー氏」が優位であった。だが、「ブルドッグ」と「牛」から導き出される「牛いじめ」という歴史的な視点に立つとその優劣関係は揺らぐ。事実、マージおばさんが報いを受ける時、ダーズリー氏は痛い目に遭う。「ブルドッグ」のリッパー (Ripper) がダーズリー氏の脚に噛みつくのだ (‘Ripper had leapt forward and sunk his teeth into Uncle Vernon’s leg’ *Prisoner of*

Azkaban 32)。ハリーの親を侮辱した張本人であるマージおばさんでなく、膨れ上がる彼女を救う力のないダーズリー氏にわざわざ「ブルドッグ」が噛みつく点は示唆的だ。牛のような「ダーズリー氏」に「ブルドッグ」が噛みつく行為は「牛いじめ」の表象に他ならず⁶⁾、「ハリー／ブルドッグ」を「いじめ」ようと試みた「ダーズリー氏／牛」が痛手を負う場面は (‘his trouser leg in bloody tatters’ *Prisoner of Azkaban* 32)、「牛いじめ」による優劣の解体に違いない。人と犬の両義的な存在であるシリウス・ブラックを示す『アズカバンの囚人』において、とりわけ、シリーズで繰り返し描写されるダーズリー家の描写において、「犬」はその活躍を予感させている。

IV. J. K. ローリングにとっての 「いじめ (る者)」(bully)

ここまでの論を整理すると、魔法界での展開に先立つダーズリー家の描写で見下されていた「石」と「犬」の復位が確認できる。『賢者の石』では、ダーズリー家においてハリーと「石」が結び付けられ、蔑まれるも、金属と石の優劣関係が「石／岩」の上で解体する。また、タイトルの指す人物が「犬」でもある『アズカバンの囚人』では、ハリーと「犬」が同じように扱われ、ダドリーの目を通せば「牛」のようなダーズリー氏に「いじめ」られるも、その優劣関係は歴史的視点をもって揺るがされる。作者 J.K. ローリングはハリーに対して「いじめ」を行なうダーズリー家、および「いじめ」の頓挫 —— 「いじめ」られる側の視点に立てば「復位」—— を繰り返し描きだす。

J. K. ローリングが「いじめ (る者)」を嫌悪する理由は、彼女の実体験に求められる。インタビューで、「全ての先生を好きでしたか？」(‘Did you like all your teachers?’) という質問に対して、彼女は次の通りに回答する。

No, not all of them. My least favourite teacher was just a bully. I’ve met quite a few teachers now, both when I was teaching and when I’ve

been visiting schools, and the bullies really do stand out. I understand from the teacher's point of view that it's very easy to be a bully, but it's also the worst, shabbiest thing you can do. We're back to Snape here.

(An Interview 9; 下線筆者)

上記の短い返答で「いじめる者」(‘bully’)という語を再三口にするほど強い拘りを示すローリングは、「いじめる者になることはとても簡単. だけど, 最も悪くて最も卑劣な行為」(‘it’s very easy to be a bully, but it’s also the worst, shabbiest thing you can do’)と言明し, 「いじめ(る者)」(‘bully’)に対する嫌悪感を顕わにする. 確かに, インタビューでは教員の「いじめ」が話題だったこともあり, 魔法学校の教員スネイプ (Snape) の名前をローリングは挙げている. とはいえ, 強固な権力関係という意味では, 「教員と学生」だけでなく, 「保護者と被保護者」における「いじめ」を彼女が嫌悪すると考えても差し支えないはずだ. 作者が, ダズリー氏 (のような人物) を嫌う理由には十分にある.

息子のダドリーが, 時に ‘porky’ (肥えた／豚肉のような) と形容され, ‘a curly pig’s tail’ (丸まった豚の尻尾) を生やし, ‘pig’ (豚) に派生する ‘piggy’ (豚のような) と表現されることを思い起こせば, ダズリー氏に関して「いじめる者」を表わす ‘bully’ から ‘bull+y’ (牛のように) を連想せずにはいられない. 単語 ‘bully’ の語源については, *Oxford English Dictionary* で ‘Etymology: Etymology obscure: possibly <Dutch *boel* “lover (of either sex)”, also “brother” (Verwijs & Verdam) ...’ と記されていることから (‘bully’, n1), ‘bull’ (牛) を起点とした展開はローリング独自の創作と言えるのかもしれない. ローリングは, 覆し難い権力関係において生じる安易な「いじめ」に嫌悪感を覚えた自身の体験に基づき, 歴史的出来事を取り込み, 言葉巧みに「いじめる者」(bully) を諷刺する.

V. J. K. ローリングの「冒頭」創作

最後に焦点を当てるべくは, ローリングが好む「言葉遊び」のうち⁷⁾, とりわけ, 文字列の順番を入れ替える言葉遊び (anagram) である. 本シリーズにおける文字列の順番を入れ替える言葉遊びで最も有名な例の1つは, 第1巻『賢者の石』で登場する「みぞの鏡」(‘the mirror of erised’) の説明であろう.

It was a magnificent mirror, as high as the ceiling, with an ornate gold frame, standing on two clawed feet. There was an inscription carved around the top: Erised stra ehru oyt ube cafru oyt on wohsi.

(*Philosopher’s Stone* 223; 下線筆者)

下線で強調した箇所を前／左からでは判読できないが, アルファベットを後ろ／右から読むと ‘[I show not your face but your heart’s desire]’ となり, その鏡が表面的な「顔」ではなく「(心の中にある) 願望」を映し出すことが分かる.

第2巻『秘密の部屋』では, より複雑な, 並び替えによる言葉遊び (anagram) がある. ハリーが見つけた日記の持ち主トム・リドルは, その名を構成するアルファベット ‘TOM MARVOLO RIDDLE’ の順序を並び替えることによって, 「ヴォルデモート卿である」(‘I AM LORD VOLDEMORT’) とその正体を明かす (330). アルファベットの並び順を変えた言葉遊び (anagram) という意味では「みぞの鏡」と同類の仕掛けとも言えようが, それぞれの性質に応じて, 細かく使い分けられている点は見逃せない. すなわち, 前者は左右が反転して見える「鏡」の性質を取り入れた言葉遊びであり, 後者にはその名 ‘Riddle’ (謎かけ) に相応しい複雑な入れ替えが仕組まれている.

文字列の順番を並び替える言葉遊び (anagram) は, 第1巻『賢者の石』と第2巻『秘密の部屋』に引き続き, 第3巻『アズカバンの囚人』においても用いられる. そして, ハリーの代父 (godfa-

ther)であるシリウス・ブラックは、アルファベットの並び替えによって造形されたのかもしれない。手順は次の通りである——シリウスは、ハリーにとっての‘godfather’（代父）となるのだが（402）、この‘godfather’を‘god’と‘father’に分解し、‘god’（神）を反転させて‘dog’（犬）とする⁸⁾。実際に、シリウスは「犬」（dog）である。要は、「代父」を意味する英単語‘godfather’から、逆さ読みして意味の違いを楽しむ言葉遊び（semordnilap）を応用し、「犬の父」とも言うべき‘dogfather’へ至った可能性が高いのだ。こうしてシリウスは、「代父」（godfather）として「犬の父」（dogfather）として、ハリーの庇護者となる。

単語への拘りは「細部まで下図が作られて」（‘outlined in some detail’ Granger, *Hidden Key* 202）作品執筆が始まった裏付けとなるだろう。第Ⅲ節で提示した「牛いじめ」（bullbaiting）の基盤となったブルドッグ（bulldog）に白羽の矢が立ったのは、「犬」（dog）に光を当てる作品をローリングが構想した以降と考えられるのであり、「牛いじめ」の「牛」（bull）としてダーズリー氏が結び付けられ、彼が‘beefy’（肥満した／牛のような）と形容されるのは、第3巻の主題及び魔法界と人間界の構造的反復を計画した以後だと推定できる。すなわち、第1巻『賢者の石』冒頭の第2段落でダーズリー氏の身体的特徴を説明する「大きく肥満して首がほとんどない」（‘a big, beefy man with hardly any neck’）という表現は（*Philosopher’s Stone* 1; 下線筆者）、「犬」に光が当たる第3巻における魔法界の予告として機能するダーズリー家の描写への伏線なのだ。

多くの読者を虜にしてきた大作の冒頭には、シリーズ中盤の展開へと結びつく伏線が歴史を引き継ぐ作者の遊び心とともに忍び込む。ローリングが歴史や物語を作品へと取り入れることはよく知られており、ハリーをトイレでいじめるとダドリーが脅すという細部さえも（*Philosopher’s Stone* 34）、Alice Mills によれば「アングロサクソンの男子生徒を描く物語の偉大な伝統」（‘the great tradition of the Anglo-Saxon schoolboy story’）に位置づけられる（Mills 2）。ダーズリー家について、Bethany Barratt が「あざけり」や「諷刺」

の対象と説明するように（Barratt 147-51）、「いじめ」の加害者ダーズリー氏の権威は作者によって徹底的に揺るがされている。「他作品、他の登場人物との比較」によって本シリーズにおける「笑い」を論じる三池洋江によれば、「the Dursleys の笑いは、大人と子ども、強者と弱者の反転という変化をもたらす特異性を持つ」（三池 87）。ローリングによる「いじめ」表象で見出せるのは、直截的な糾弾ではなく、歴史的厚重さと作者特有の軽妙さを兼ね備えて細部にまで忍び込む「笑い」——「牛（bull）のような／肥満した」（beefy）いじめる者（bully）への辛辣な笑い。入学する学校の違いで「とても愉快」（‘very funny’）とハリーを嘲っていたダドリー（*Philosopher’s Stone* 34）、あるいは彼の家族こそがむしろ笑い者なのである。軽やかな諷刺に込められた、「いじめ（る者）」を断固として許さない、作者ローリングの毅然とした姿勢は明らかだ。『ハリー・ポッター』シリーズの冒頭は、作品の出発点でありながら、伝統を継承した作者が自身の経験と信念に基づき、物語展開の緻密な計算と機知に富んだ創造的な言語使用を両立させた最果て、と位置づけられないだろうか。

注

本稿は、日本英文学会関西支部第16回大会における口頭発表「『石』と『犬』とハリー・ポッター——『賢者の石』と『アズカバンの囚人』におけるダーズリー氏のいじめ」（2021年12月18日、zoom）の原稿に加筆修正を施したものである。

1) 『ハリー・ポッター』シリーズの人物名および固有の（カタカナ）表記については、松岡佑子による翻訳本及び映画版の字幕（戸田奈津子訳）を参照している。また、本稿では次の通りに略記して、丸括弧内にページ番号を記す。第1巻 *Harry Potter and the Philosopher’s Stone* (1997) は『賢者の石』もしくは *Philosopher’s Stone*、第2巻 *Harry Potter and the Chamber of Secret* (1998) は『秘密の部屋』もしくは *Chamber of Secret*、第3巻 *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* (1999) は『アズカバンの囚人』もしくは *Prisoner of Azkaban*、第4巻 *Harry Potter and the Goblet of Fire* (2000) は *Goblet of Fire*、第5巻 *Harry Potter and the Order of the Phoenix* (2003) は『不死鳥の騎士団』もしくは *Order of the Phoenix*。

2) Bethany Barratt は ‘When we [readers] first encoun-

- ter the Dursleys, they are indeed unlikeable' と、初登場の場面からダーズリー家が読者にとって好ましくないことを指摘している (148).
- 3) ダドリーは、誕生日プレゼントを受け取るも、「何」を買ったかではなく「いくつ」買ったかではしか判断できず (*Philosopher's Stone* 22), 価値を理解できずにプレゼントの金属類を壊してしまう (*Philosopher's Stone* 40). ダドリーがプレゼントの「(個)数」に拘る様子は, J. K. ローリングがインタビュー ('From Darcy to Harry Potter [...]') にて愛読する作家として挙げた Jane Austen (1775-1817) の小説 *Pride and Prejudice* (1813) に登場する William Collins や *Mansfield Park* (1814) に登場する Rushworth を想起させる. Austen 作品からの影響を指摘した先行研究は, 例えば John Granger (*Bookshelf* 23-40); Beatrice Groves (98-120).
 - 4) 本文中では「金属」と「石」の関係性において, 「石」の「復位」に焦点を当てている. 優位に位置づけられていた「金属」の側に焦点を当てれば, その権威は喪失している. 作者 J. K. ローリングが 'My least favourite subject was metalwork' と述べていることから (*An Interview* 9), 「金属加工」に対する彼女自身の個人的な思い出に由来するのかもしれない.
 - 5) タイトルの多義性は既に指摘されている. 第2巻, 第4巻及び第7巻の解釈は小島基洋 (93) を参照.
 - 6) Dr. Dieter Fleig によれば, 牛に立ち向かうに十分な「強さ」と「勇敢さ」を備えた英国の「ブルドッグ」は「牛いじめ」に適しており, その特徴的な顎は「強く, 万力のように離さない」 ('the strong, viselike grip' 63) ことを可能にする. 映画版において, ダーズリー氏に噛みついたブルドッグは (*Prisoner of Azkaban* 00:04:48), 強靱な顎の力で「強く, 万力のように離さない」 (*Prisoner of Azkaban* 00:05:41). 膨張し浮遊するマージおばさんのみならず, ダーズリー氏に食いつがるブルドッグの姿も見逃してはならない.
 - 7) 本文中で挙げた anagram 以外には, ぎなた読み (mondegreen) による展開や (*Chamber of Secrets* 51), スフィンクスによる謎かけが出題されるだけでなく (*Goblet of Fire* 530), 下記の通り, 意図的な「言葉遊び」は随所に見られる. すなわち, 『アズカバンの囚人』第6章 (101-28) の各場所において 'dog' に関する単語が現れる. まず, 大広間の場面で (101-4), Slytherin に所属する女子生徒が犬種 'pug' のような顔と記される (101). 次に, ハリーたちが移動教室を通る廊下では (104-6), 額縁の中の男性が 'dogs' と声を上げる (105). その後, 辿り着いた古い学の授業中に (106-14), 担当教員の Professor Trelawney は 'The giant, spectral dog that haunts churchyards! My dear boy, it is an omen—the worst omen—of death!' と叫ぶ (112-13; 下線筆者). ハリーたちが再び大広間へと戻った場面では

(115-17), ロンがハリーに 'you haven't seen a great black dog anywhere, have you?' (115; 下線筆者) と尋ね, 午後の授業では (117-25), ハグリッドが Fang という大型犬を連れていてだけでなく (117), 「ダメになっている」 ('going to the dogs') と悪態をつくマルフォイの言葉にも 'dog' が含まれる (119). その後, 夕食後にハグリッドを探す場面で (125-26), 話題は (犬でもある) 「シリウス・ブラック」に触れられ (126), 到着した小屋では (126-28), ハグリッドが 'like a dog' と「犬」に例えられる (128). 唯一, 'dog' / 「犬」を読み取れないのは, Professor McGonagall の授業である (114-15). しかし, マクゴナガル先生の授業「変身学」 ('Transfiguration') は, 動物に変身する授業である (114). この 'dog' / 「犬」の空白は, 後にシリウス・ブラックが「変身術」を用いることで埋められるべきかもしれないし, 明記されていないだけでこの授業内で誰かが「犬」に変身していたとの想像で埋められるべきかもしれない. いずれにせよ, 本章において作者ローリングが 'dog' / 「犬」を意識的に描き込んでいることは明らか.

- 8) 「犬」(dog) と「神」(god) の反転までなら, J. K. ローリング独自ではない. 例えば, James Joyce の *Ulysses* には, 'Dooooooooooooog!' の5行後に 'Goooooooooooood!' (489-90).

引用文献

- Barratt, Bethany. *The Politics of Harry Potter*. Palgrave Macmillan, 2012.
- 'beefy'. *OED Online*, Oxford UP, www.oed.com/view/Entry/16964. Accessed 26 Dec. 2021.
- 'bully'. *OED Online*, Oxford UP, www.oed.com/view/Entry/24601. Accessed 4 Feb. 2022.
- Fleig, Dr. Dieter. *Kampfhunde I [The History of Fighting Dogs]*. Translated by William Charlton, T.F.H. Publications, Inc., 1996.
- Granger, John. *Harry Potter's Bookshelf: The Great Books Behind the Hogwarts Adventures*. Berkley Books, 2009.
- . *The Hidden Key to Harry Potter*. Zossima P, 2002.
- Groves, Beatrice. *Literary Allusion in Harry Potter*. Routledge, 2017.
- Harry Potter: A History of Magic*. Bloomsbury Childrens Books, 2018.
- Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. Directed by Alfonso Cuarón, Warner Bros. Entertainment Inc., 2004.
- Joyce, James. *Ulysses*. Vintage Books, 1993.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. Penguin Books, 1992.
- Mills, Alice. 'Harry Potter and the Terrors of the Toilet'. *Children's Literature in Education*, vol. 37, no. 1, 2006. pp. 1-13. Accessed. 1 Nov. 2022.
- 'prisoner, n. 2'. *OED Online*, Oxford UP, www.oed.com/

- view/Entry/151566. Accessed 15 Jul. 2023.
- Rowling, J. K. *An Interview with J. K. Rowling*. Egmont Books Ltd, 2002.
- . ‘From Mr Darcy to Harry Potter by way of Lolita’. *Sunday Herald*, 21 May 2000. *Gale Business: Insights*. <https://link.gale.com/apps/doc/A79460638/GBIB?u=kyotodai&sid=bookmark-GBIB&xid=f3f19246>. Accessed 10 Dec. 2023.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. Bloomsbury, 2014.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. Bloomsbury, 2014.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. Bloomsbury, 2014.
- . *Harry Potter and the Philosopher’s Stone*. Bloomsbury, 2014.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. Bloomsbury, 2014.
- Wallace, Catherine M. ‘Rowling as Moralist: Harry Potter and the Bullies’. *The Christian Century*, vol. 118, issue 21, 2001, pp. 18–21. Accessed 11 Mar. 2023.
- 小島基洋. 「ハリー・ポッターとホグワーツ特急のコンパートメント: J. K. ローリングのホモ・ソーシャルな空間工学を読む」『英文学評論』vol. 87, 2015, pp. 79–98.
- 三池洋江. 「Harry Potter シリーズにおける笑い —— The Dursleys の場合 ——」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』vol. 25, 2022, pp. 81–94. Accessed. 2 Dec. 2022.

The Concept of ‘Bully’ Demolished in J. K. Rowling’s *Harry Potter* Series: Restoration of the Philosopher’s ‘Stone’ and ‘the Prisoner’ of Azkaban

Hisakazu SUGINO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This study analyses the failures of ‘bullying’ in the non-magical Dursley family, prior to the magical world. First, doubts are established about the superiority of ‘metal’ over ‘stone’ at the Dursleys’ house in *The Philosopher’s Stone*, which is depicted in Harry’s and Dudley’s school names, ‘Stonewall High’ and ‘Smeltings’ respectively. The Dursleys’ failure on the ‘Rock’ symbolically denies the superiority of ‘metal’ and represents the restoration of ‘stone’. Second, this study casts doubts on the superiority of ‘bull’ over ‘dog’ at the Dursleys’ house in the third volume, *the Prisoner of Azkaban*. The relationship is depicted as a ‘beefy’ man, Mr Dursley, and ‘a box of dog biscuits’, a Christmas present for Harry. By way of ‘bullbaiting’, the study denies the superiority of ‘bull’ and represents the restoration of ‘dog’ in its stead. Through the lens of ‘bullying’, the article then illuminates J. K. Rowling’s intricate portrayal of the early events in the *Harry Potter* series.